

# 那覇市曙町にあった石灰窯の聞き取り調査報告

当山 昌直†

はじめに

1 聞き取り調査の方法

2 聞き取り調査の内容

3 考察

3-1 移転前位置の検討

3-2 場所不明の石灰窯について

まとめ

はじめに

『昔おきなわ風景探索 No. 1』<sup>1</sup>の冒頭に那覇市曙町にあった石灰窯の紹介を行った。これは、沖縄県公文書館が所蔵する写真の中に（写真番号：011323）、沖縄の瓦などに使う漆喰の原料となる生石灰を作成する石灰窯が写っていたことに注目したからである。写真は、1965年（昭和40）の琉球政府時代のもので、曙町の埋め立ての様子を撮影したものであった。石灰窯は石灰焼窯とも呼ばれ、フェーガマ<sup>2</sup>（石灰窯）、フェーヤチガマ<sup>3</sup>（石灰焼窯）と呼び、沖縄ではほとんど記録がない状態であった<sup>4</sup>。情報が少ない中、石灰窯があった場所を調べるとちょうど同位置に「沖縄石灰工業所」があり、電話で確認したところ、関係者ということが分かった。沖縄文化を支える生業の実態について記録していくことは重要であり、聞き取りをお願いしたところ、快くひきうけていただいた。

本報告では、その聞き取り調査の内容を、話者の了解を得て、さらに内容を点検していただいたうえで報告することとした。

## 1 聞き取り調査の方法

2024年（令和6）8月29日、那覇市曙町に所在する沖縄石灰工業所代表者大城陽三氏を訪ねて、聞き取り調査を実施した。

大城陽三氏は、1956年（昭和31）生まれ、父・故大城祐葦氏が経営する沖縄石灰工業所に入社、その後、事業を継承し、今日に至っている。聞き取り当時は、74歳であられたが、工業所の現場におられた。

沖縄石灰工業所は、創業1890年（明治23）であり、創業者は大城陽三氏の祖父大城次郎氏で、大城陽三氏は三代目であり、現在、長男と次男が所員として事業を行っている。現在の事業内容は、後述の聞き取りでも触れるが、漆喰を中心とした石灰関連の商品を取り扱っている。

調査は、沖縄県公文書館所蔵1962年（昭和37）10月25日米軍撮影の空中写真（写真番号：AP621025A2\_209）と石灰窯関連の写真数点を大城氏に見てもらいながら、筆者の方から質問をし、答えていただいた。調査の様子は、本人の同意を得てビデオで撮影<sup>5</sup>させていただいた。

---

†とうやま まさなお（公財）沖縄県文化芸術振興会 公文書管理課 評価選別嘱託員

1 当山昌直『昔おきなわ風景探索 No. 1.』（沖縄県文化振興会 2024）p.1.

2 沖縄市教育委員会文化課（編）『沖縄市文化財調査報告書第9集 ふるさと園復元概報』（沖縄市教育委員会 1982）

3 那覇市企画部市史編集室（編）『那覇市史資料篇第2巻中の7「那覇の民俗」付図 那覇の歴史民俗地図（5葉）』（那覇市企画部市史編集室 1979年）

4 本稿では石灰窯と称しておく。

5 写真を見ながらの調査ということもあり、撮影はほとんど手持ちで行った。

## 2 聞き取り調査の内容

聞き取り調査の内容は、録画したビデオからテキスト化を行った。筆者の質問は「――：」で示し、大城氏の回答を「大城：」であらわした。テキスト化にあたっては、意味がとおるように、内容を変えない範囲で修正した。聞き取りでは、写真をみながら指で指すこともあったので、録画面面も参考にしながら、適宜場面の様子を [ ] で示した。以下、聞き取りの内容を記す。

### 曙町の石灰窯

――：これ（図1）はみなさんところですか。

大城：（当時の）屠殺場はまだあそこなんですよ。火葬場はまっすぐそこなんですよ。うちの窯はこの辺ですね。2基あったんですよ。それで隣にも同業者が3軒あったんです。多分、一軒で2基じゃないかな？うちも2基ありました。（図2を見て）そうですね。うちは右端で、これが隣の与儀にあったシマセッカイ（島石灰）。その隣がダイドウセッカイ（大道石灰）。

――：はい。

大城：これがうちじゃないかな？沖縄石灰、多分。6基もないのにとっていたら、今思い出しました。このあたりは東シナ海、海なんですよ。

――：昔はそうだったらしいですね。

大城：[室外に出る] これのあっち（図3）のへりが海で全部埋め立てなんです。だから、この倉庫の所に窯があって、倉庫のあっち側が埋立地なんです。

――：はい。もちろん窯は残ってないですよ。[室内に戻る] これが（図2をさして）じゃあ皆さんですね。

大城：多分これが大きいですね。隣に一軒二軒あったからね。うち一番端っこだったと思うんですよ。うちで三代目なんです。私がやって48年なんです。

――：これ（図4）は米軍が撮ったもので、1945年（昭和20）。これ（図2）よりもっと古い写真ですが、泊じゃないかなと思うんです。これ（図4の左側）、恐らく石灰窯だと思いますけど。

大城：これは、なんかサバニかなんか船がありますね。天馬船かな？石灰を積む。

――：今のイユマチ（泊いゆまち）付近じゃないかなと思います。



図1 曙町にあった石灰窯。左側の煙突は火葬場（1965年）推座：N26.237765° E127.682796° / 写真番号：011322



図2 石灰窯の全体の様子。矢印は大城氏の石灰窯（1965年）写真番号：011322



図3 所内のガレージの所に石灰窯があったと説明（2024年8月29日）

6 図には必要に応じて座標と公文書館の写真番号を付している。推定座標は「推座」、写真番号は「写番」と略して表示した

### 手持ち写真の石灰窯

大城：私が持っている写真（図5、6、7）は、もらったんですけど。友達の写真屋がいるもんだから<sup>8</sup>。これはうちの窯じゃないですね。たぶん恩納村のどこかじゃないかな。

——：恩納村？

大城：コーラル石灰というのがあった。形がこんなじゃなかったような気がするんですよ。3基ありますよね（図7）。うちは2基だから。うちじゃないなと思ったけども、まあ同じよう窯だからもらったんですよ。うちは2基しか無いからどっかでしょうね。[天馬船をさして]これに積んで石灰をチービシで（採取してきた）。（チービシは）すぐだから。（この写真は）ウチじゃないかもしれないですけど。船を付けてすぐ窯で（焼くようになっている）。昔はもう、海。埋立する前、すぐ前はね。

——：やっぱり船は伝馬船ですか。

大城：伝馬船。二隻もっていて、チービシまで行って、潜って、石灰（を採取）。ここにすぐ横付けして。

——：ハマサンゴですかテーブルサンゴですか？

大城：テーブル（サンゴ）も。岩石（琉球石灰岩か）もあるし。テーブルはテーブルで。焼く時に真ん中に積んで。要するに石の種類によって積方がちがうんですよ。テーブルもあったんですけども、復帰してから。法律が適用され、テーブルは採れなくなったんですよ。それでもう、やめたんですよ。何十年前かな。（材料は）テーブルもあるし、岩石もあるし。テーブルなんかドーグ（道具）してるんだけど、こういう風に積むときに間にワタクシグワー作った（へそくり：遊びの部分ということか）りして、いろんな石灰を、うまく積んでですね。下から積み上げていって。

——：しかし、これも（図6）よく残っていますね。

大城：これはどこかな？うちじゃないと思うんですよ。これも海の側ですよ。

——：島が見えますね。これがヒントになるかもしれないです。

大城：島はあそこにはない。東海岸は石灰がなかったんだと思うんですよ。聞いたことないんですけど。（あ



図4 石灰窯と思われる泊付近の写真（1945年5月）  
推座：N26.228173° E127.681514° /写真番号：80-04-4



図5 石灰窯1（場所、日付不明）大城陽三氏提供

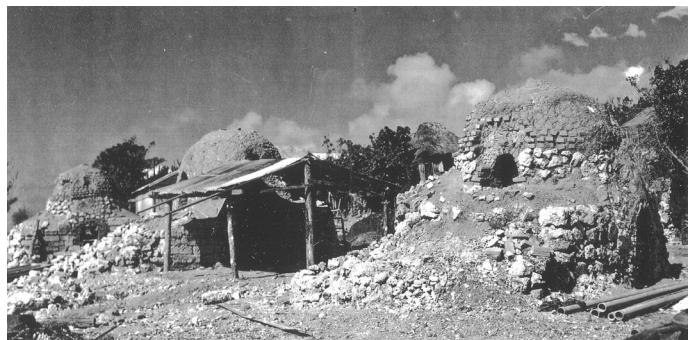


図6 石灰窯2（場所、日付不明）大城陽三氏提供

7 他に数点あるが、拡大などの類似、または不鮮明ということで、代表的な写真だけを示した。

8 それ以上の詳しい情報は得られなかった。

るとしたら) 西海岸。こっちは東シナ海側の石灰窯だとすると、恩納村の古波蔵さんかなと思うんだけど<sup>9</sup>。ちょっと定かじゃないですね。

——：私がもう大学生の頃は恩納村でまだ煙が出ていたんですけどね。

大城：ありましたね。廃業したんだけど。

——：あそこは写真のように大きくなかったですね。

大城：そうですね。こんなにもなかったかもしれない。

大城：この写真は友人からで、私がこの同じ仕事だから。

参考に持ってきたから、貰ったんですよ。だから場所は聞いてないんですよ。

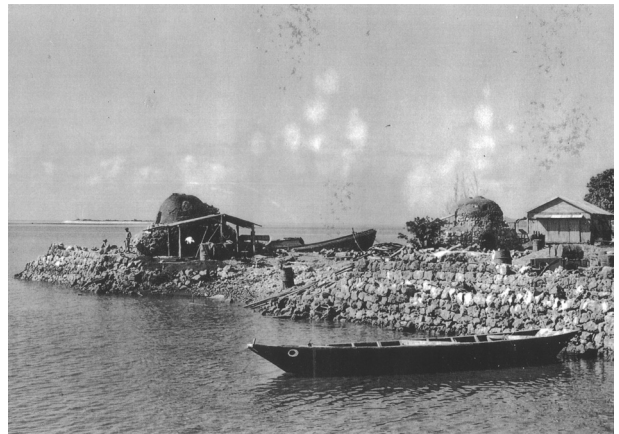


図7 石灰窯3 (場所、日付不明) 大城陽三氏提供

### 石灰窯の燃料

——：この写真の時には重油使ってるんですか。

大城：はじめは木ですよ。木と廃タイヤですね。

——：写真を調べてみたらなんか薪があんまり見当たらないもんだから。

大城：私がやってからはもう重油に変わってました。私は継ぐ頃には、古タイヤと木材だけでも、なんかやっぱり煙が強いので。

——：昔は、あの辺は塵捨て場ですよ。

大城：この辺はもう果ての果てで、何も無いところですからね。昔は、この道が馬車道だったんですよ。昔の話だけでも、煙を出しても良かったんだけど、段々埋立して、都会になったもんだから。古タイヤなんか焼いておれないんで、重油。バンカーオイルが一番安い油ですね。あれで焼いていました。

——：いつ頃からこの重油やってるのを覚えておられますか？

大城：だいたい25歳(1950年生まれ)ぐらいだから50年ぐらい前(1975年頃)かな。この場所は近くには浮浪者がいるし、ゴミ捨て場があって、あまりいい場所じゃなかったんですよ。

### 石灰の出荷

——：この石灰はどこに出してたんですか？出荷は。

大城：出荷は、個人の左官や瓦工場、先島の施工業者です。

——：私、与儀市場近くにいたもんだから。鉢嶺材木店とか。与儀小学校の向かい。小さい時よく見てたんです。

大城：あのね、与儀小学校の向かいに、シマブクさんと言って、シマ石灰とかあったんですよ。さっきの(図2) うちがいちばん下でその隣ですね。そこにあったんですよ(隣を指さす)。だから与儀小学校、そこですね。島さん<sup>10</sup>。

——：みなさんところは？

大城：うちは、ここに移る前は牧志、ジッカンジ(十貫瀬)通りがあったんですよ<sup>11</sup>。石灰ヤー(石灰屋)が。で、窯はここ(曙町)にあったんですよ。ここで焼いて、牧志、ジッカンジまで持って行って。混合して(漆喰などに)加工した。お客さんっていうのは、要するに一般の左官です。今は、左官も全部なくなってお客さんっていうのは瓦工場ですね。瓦工場が左官を抱えて。昔は個人個人で、左官も個人で、たくさんいたんだけど、(個人職人は)みんないなくなっている。(今は)瓦工場でうちの製品を

9 恩納村仲泊の古波蔵石灰工業所と思われる(注2参照)

10 沖縄住宅地図出版社 編『ゼンリンの住宅地図那覇市'69』(沖縄住宅地図出版社1969)には「島石灰工業所」と地図上に示されている。座標はN26.206079° E127.690270° 付近(GIS等を利用して特定。以下同じ)。

11 (同上)には「沖縄石灰工業所」と示されている。座標はN26.219528° , E127.688945° 付近。

買って左官に塗らしている。最近はこの状況ですね。

——：瓦工場でだいたい抱えているんですね。

大城：はい瓦工場で。個人はほとんど。もう名前でないですね。亡くなって、高齢化して、それで瓦工場でですね。セメントは使いません。原料は至って簡単で。このサンゴ。サンゴ石灰岩。焼いて。藁、藁らってイナーワラ（稲藁）ですね。うちなんかは、綱引きの綱を再利用してたんですけどね。那覇大綱引きとか、糸満とか与那原とか、色んな全島の綱を使いました。藁がなかった時期は綱を。だから原料というのは藁と綱、水。単純なもん。

### 石灰の入手元

——：石灰はどこから

大城：昔は自分で石灰とってたけど。今は内地の大分県から。

——：あの消石灰ということで。石灰でね。

大城：漆喰の石灰岩とセメントの石灰が一緒なんですよね。全部石灰岩ですから。セメント屋の小野田とか、たくさんあるんですよね。で原料は一緒なんです。

——：漆喰は、なんで普通に置いていて、固まらないんですかね？セメントだったら、普通固まるでしょう？

大城：漆喰は、置いていたら固まりますよ。漆喰は、瓦に塗ったら乾くから、放っておいたら乾きますよ。時間かけないと。しかし、セメントよりは速乾性はない。セメントはすぐ固まるが、漆喰はかなり、ゆっくり、ゆっくり。性質がちよっと違いますね。

——：子供の時から不思議で、材木屋にいつも置いてただけど。なんで固まらないか。藁を混ぜているから？

大城：藁を混ぜたら、固まりやすくなるかもしれない。空気が入ってくるから。固まりやすい。それと強くなるんです。藁の繊維が石灰をつなぐと。だから藁がないと漆喰はもろいですよ。ポロッと剥げたり。

——：お年寄りからの聞き取によると、昔は石灰も自分たちで焚いてからニーナシカンダ（スナヅル）と藁とか泥を混ぜて漆喰をつくり、井戸の壁とか墓にも使ったと話していました。

大城：これは、うちも聞いたことがありますね。あの内地でもツノマタとって、要するに海藻みたいなもの。今はやってませんよ。かなり昔はこれやってましたね。だから同じような話ですよ。沖縄でも。やっぱり海藻類はヌメリがあって。塗っても滑らかなんでね。そういった性質があるもんだから。聞いたことがありますね。

——：左官たちが何かに使ったり、昔のイシグー（琉球石灰岩を砕いたもの）はニーナシカンダで固めたよ。

大城：イシグーも水を混ぜると粘りがあるんですよ。土はどっちでも粘りがあるんですよ。昔はあれで家葺いて。イシグーをヤンバルダケの上に置いて、瓦の下に入れてたんですよ。

### 沖縄石灰工業所

——：今息子さんが引き継いでるんですか？

大城：うちの祖父、オヤジ、私、私の息子で4代目ですね。

——：（大城さんの）フェーヌ窯（石灰の窯）はどこにあったのですか。

大城：窯はここでしょう（同じ位置）。これ、買ったのは戦後。戦後だと思っただけど、この土地はうちの親父が手に入れた。

——：米軍の戦前の空中写真にはこの位置のフェーヌ窯が見つからない。

大城：戦後じゃないかな。ここに移ってきたのは。思



図8 スナヅル（クスノキ科）沖縄島の一般的な方言でニーナシカンダと呼ばれる（多良間島、2019年）

い出した！ここに来る前は水産高校の所におりましたよ。

——：[図4の写真をみせて]これがどうやら窯みたいなんです。ミートウジの岩がこの辺に見えます。だからまだ泊まりは埋め立ててないんですよ。だからこれかもしれないですね。この写真は沖縄戦の時のものですから。

大城：初代は1893年（明治26）から創業したんです。

——：フェーヌカマじゃないかなと思って見ていますが。

大城：感じはそういう感じはしますね。窯なのか。石を積んでおいて。集積。これだけ形がありますよね。窯のね。うん、そうだ、あそこがありました。今の泊（泊通信）高校、元の沖縄水産高校。水産高校は窯があるときはここには無かった。それ聞いてましたよ。あっちからここに移転したと聞いています。この曙に。もう忘れたことは、なんか聞いたら思い出していますね。

——：やっぱりもう昔から、戦前からやってたんですね。

大城：そうですね。戦前はここ（曙）になかったと。

——：あの今やっぱり写真なんか見てたらね。新しくできたんだなと思って。

大城：うん。シマさんのところとここが戦前のところでやってたのかな？

——：波之上にも（窯が）あったみたいですね。

大城：ああ、そうですか。じゃーもう。私は25歳ぐらいから引き継いでいるから。（親父たちがやっていた窯の話は）ほとんど昔の話になってます。

——：じゃあ。今の漆喰はあのあれですねヤマトから。

大城：あの石灰は仕入れて、それに藁を混ぜて加工してるんです。首里城もやって、納品も終わりましたけどね。2024年（令和6）1月に納品がちょっと。7月いっぱい全部納めて。8月にはできるんだから。もうそろそろ。10月までには瓦、終わるじゃないかって。

——：首里城の歓会門の道の端には、イシグーを固めるのにニーナシカンダを使ったと言われています。戦前のものです。

大城：それなるほどね。今もこういうのもありますかねこの。

——：もうほとんど残ってないようです。

大城：なかなか復元するのは難しいですね。だから、昔のちゃんとした石灰岩じゃないんですよ。首里城もそのままやりたいんだろうけど、そういうのもできない。材料がね。

——：文化財など、昔のもの使って、復元しなさいといわれているようです。漆喰だったら石灰焼かないといけない。

大城：できるところはないでしょう。

——：今、同業者は何カ所ぐらいあるんですか。シマさんとかは。

大城：廃業しましたね。ダイドウもずっと何十年前に。コザに一つと与那原に一つ。

——：石灰や藁などの材料を写真撮らせてください。

大城：これが藁、藁を圧縮しているんですよ。それ（藁）は中国製。圧縮して。容量小さくして（送られてくる）。（次は）石灰ですね。主要原料一つしかないんですけども。マイクロライム。石灰なんですよ。粉末。生石灰。これと藁と水で混ぜてこねて。機械にかけて。この藁がひとりで糸みたいになるんですよ。繊維にこれが抱合して。漆喰の強度が出てくる。黄色になっているのは藁の色なんです。

——：これ固まらないですか。

大城：大丈夫。でも半年、一年したら固まりますよ。中まで空気が通らんから固まらないんでしょうね。表面は少し硬くなっていますよ。中は空気が入らないから硬くならない。あれは機械からでてきたもの。

袋に入った製品です。

——：今日は、お忙しい中、ありがとうございました。

### 3 考察

聞き取り調査によって図1と2の窯は、石灰窯（石灰焼窯）であることがわかった。同時に、窯の事業所の名前がわかり、奥の方からシマセッカイ（島石灰）、ダイドウセッカイ（大道石灰）、オキナワセッカイ（沖縄石灰）で、それぞれの窯を所有し、沖縄石灰は2基所有していることが確認された。これまでの聞き取りの概要をまとめると以下のようなになる。

沖縄石灰工業については、以前は泊付近（現在の泊通信高校）にあって、当時の沖縄水産高校（後年は泊通信高校）の新設工事のため、写真（図1, 2）でみる現在の位置に移転した。以前は、木や廃タイヤなども燃やしていたが、都市化が進むことになり、重油を使うようになった<sup>12</sup>。石灰は、天馬船<sup>13</sup>を利用して、沖合にあるチービシで採取し、窯の側に横付けした。焼くときに、テーブルサンゴをうまく重ねて隙間などをつくった。

石灰窯については、周囲が住宅地になったこともあるが、1972年（昭和47）の復帰（施政権返還）によりサンゴが採取できなくなり、1970年代に取り壊して現在に至っている<sup>14</sup>。

#### 3-1 移転前位置の検討

聞き取りでは、曙町に移転する前は、泊にあって、学校の新築にともなって立ち退いたという。図4の写真は、背後にミートウジー（夫婦岩／夫婦瀬）が写っており、護岸の形やその他の特徴などから天久宮とアミクシーシンサーと間の南側の海岸と思われる。次に、GISを利用して、米軍上陸前の1945年（昭和20）2月28日（図9）、地上戦終了後の1945年（昭和20）12月10日（図10）、沖縄県立沖縄水産高等学校新設後の1962年（昭和37）10月25日（図11）撮影の空中写真を用いて同一範囲を示した。

図11に示すように、沖縄水産高校の敷地と重なる図9の海岸線沿いに石灰窯があったと推定される。その範囲は、図4の写真と重なっていると思われる。したがって、図4は昔の石灰窯が写っているといえるだろう。図12は、天久宮付近を海側から撮影した写真である。この写真をさらに拡大したのが図13である。海岸には石垣のように積まれた岩が確認できる。そしてお椀を被せたような形の構造物が確認されるが、これらが石灰窯と思われる。そのうちのひとつ（矢印で示す）は、頂部に窯の孔が確認される。これも窯であることを示す一つの特徴と思われる。図14には、金武町中川海岸で確認された石灰焼窯の断面を示す<sup>15</sup>。以上の結果から、図4や図13にみえる窯と思われる構造物は、聞き取りの中で出てきた沖縄石灰工業所の曙町へ移転する前の石灰窯がこれらの構造物の中に出てくるものに含まれていることが推察される。

12 那覇市企画部市史編集室（編）『那覇市史資料篇第2巻中の7「那覇の民俗」』（那覇市企画部市史編集室1979）には、曙町の同一場所に石灰焼窯があり、重油が使われていたことが記されている。

13 天馬船は舟底が浅いので浅瀬でも利用できる。

14 2025年（令和7）12月25日、大城陽三氏への聞き取りにより確認。

15 地名。「天久誌」編集委員会（編）『天久誌』（天久資産保存会2010）より。

16 前掲 沖縄史教育委員会文化課（編）。2025年（令和7）12月17日、大城陽三氏への聞き取りによると、曙町にあった石灰窯の内部も同様であったという。



図9 天久宮（緑矢印）、アミクシーシンサー（青矢印）付近の空中写真。赤矢印は図4の推定される撮影方向（1945年2月28日）資料コード：KS00000073【ON24146 005-2】



図10 天久宮（緑矢印）、アミクシーシンサー（青矢印）付近の空中写真。（1945年12月10日）写真番号：AP451210A0\_022



図11 天久宮（緑矢印）、アミクシーシンサー（青矢印）付近の空中写真。沖縄水産高校が設置されている（1962年10月25日）写真番号：AP621025A2\_214, 216を接合



図12 天久宮付近の海岸。図13の拡大（1945年6月27日）写真番号：06-63-3



図13 天久宮付近の海岸。図13の拡大（1945年6月27日）写真番号：06-63-3

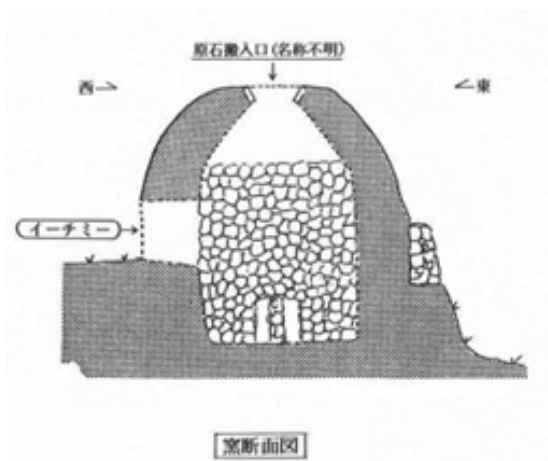


図14 金武町中川海岸の石灰焼窯（沖縄市教育委員会文化課，1982）より。

### 3-2 場所不明の石灰窯について

大城陽三氏より提供された図5, 6, 7の写真については、撮影場所や撮影年月日が不明になっている（以後不明石灰窯写真と呼ぶ）。この三点の写真について、場所の特定を試みたい。まず、最初に、図5と図6は、共通点をもっていることから、同一の窯を撮影していることが推察された。その共通点を図15と16に矢印で示す。代表的な共通点としてあげると、赤矢印は窯の前に鉄パイプ、青矢印は石積みの積み方や石の形が類似、緑矢印は何かの枠、これらがほぼ一致しており、総合的にみて同一の窯と思われる。ただし、図7の写真については、図5と6との写真上の共通点が見つからないこともあって、別の窯と思われる。

場所を特定するため、図15と16について見てみる。図15を拡大してみると、正面にカマグチ<sup>17</sup>（窯口）がみえ、口の周辺はレンガが使われているように見える。その周辺の窯の底部壁は多孔質であることから沖縄島南部に広くみられる琉球石灰岩と思われる。少なくとも沖縄島北部でみるような変成岩（名護層など）とは異なるように見える。その周囲を土で固め、窯の上部はレンガと思われるものがつまれ、土も利用されているように見える。カマグチの上、窯の上部に見える穴は煙突だろうか。金武町中川の窯ではキツブミーと呼んでおり、カマグチの反対側上部にある<sup>18</sup>。おそらくそれと同一の機能（排煙）を備えていると思われる。窯の前方にあるドラム缶の影の位置や長さや写真左側の海（船の一部も見える）の位置から考えて、おそらく沖縄島の西海岸と思われる。図16は、その西側から撮影したと思われる、その反対の背後（東側）は、丘陵になっていることがわかる。太陽を背後して撮影したと思われる、窯の中腹付近にはイーチミー<sup>19</sup>（息穴？）がはっきりと見られる。また、屋根の影も太陽の方向を示しており、沖縄島の西海岸である可能性を示している。

図17は、図15と16の同一撮影者が、同一の場所（付近）で撮影した可能性がある。それを前提に考えてみたい。図17の前方には天馬船が見える。その反対側の背後にも船の一部が見える。図中に①で示した沖合に砂地でできた小さい島が見える。このような沖合の島として那覇市の西海上にあるチービシが考えられる<sup>20</sup>。また、図中の②を拡大してみると、中部以北にみられるような比較的高い山影（恩納岳？）が見える。このような事例を総合的にみて、おそらく、安謝から泊の間の海岸沿いの可能性が高いと思われる。一方、『天久写真集』<sup>21</sup>には、「ヘーヤチガマ 崎樋川(旧火葬場通り)1969年(昭和44年)」と題して、石灰窯の写真が紹介されている。曙町の石灰窯と同じ位置である。基本的に図15と同じような形に見えるが、石積みはきれいで土は少ないようにみえる。図15から図17と違って、電柱が立っ

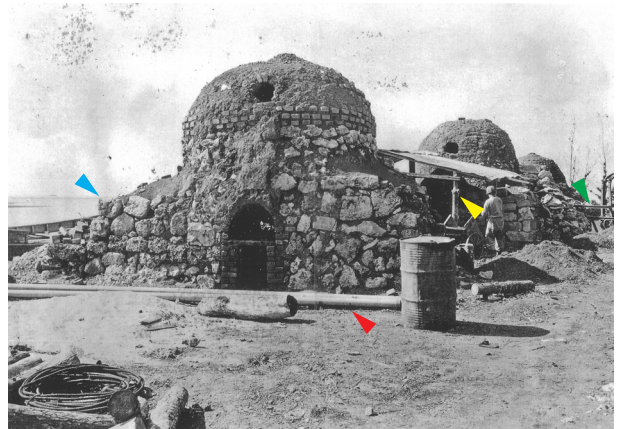


図15 石灰窯（場所、日付不明）大城陽三氏提供



図16 石灰窯（場所、日付不明）大城陽三氏提供

17 前掲 沖縄市教育委員会文化課（編）。

18 前掲 沖縄市教育委員会文化課（編）。

19 前掲 沖縄市教育委員会文化課（編）。

20 糸満市にも石灰窯があったと伝えられているが、元糸満町史事務局におられた加島由美子氏に図17の写真を確認したところ、調査の結果、糸満市ではないことが分かった。

21 「天久写真集」編集委員会（編）『天久写真集』（天久資産保存会 2017）

ていることがわかる。図15からドラム缶やトタン屋根があることから、戦後の可能性が高いが、電柱がないので、電化がすすんでない戦後間もない頃かもしれない。図1、2と図15などの写真を比較するとトタン屋根の作業場が窯の南側のカマガチにあるのは共通するが、窯の石積みの緻密さが異なるので、同一の窯ではないかもしれない。

もし、大胆な予想が許されるならば、場所不明の窯は沖縄水産高校が現在の泊通信高校に移転する前にあった戦後の窯と思われる。この確認については、当事者や関係者を探すことにあるが、現在それは難しい状況にある。他に文献や写真などがあるかもしれないので、ご存じの方はご教示をお願いしたい。

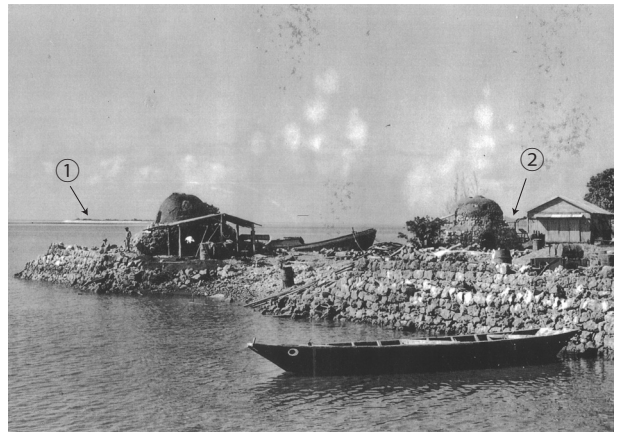


図17 石灰窯（場所、日付不明）大城陽三氏提供

## まとめ

建材としての漆喰は、沖縄の瓦屋根をはじめ、お墓、井戸などにも利用されている。その漆喰は、伝統的な生業としてサンゴなどの石灰を窯で焼いて作るわけであるが、この石灰窯についての情報はきわめて少ない。沖縄文化を支えている漆喰、その原料となる石灰ではあるが、赤瓦の屋根も減少し、漆喰の需要も減り、永年続いてきた漆喰製作も衰退の一途をたどっている。

今回、沖縄県公文書館に所蔵されている琉球政府時代の資料の中に石灰窯の写真が見つかった。写真は、石灰窯というよりは、周辺の埋め立て地を撮影したと思われるが、その景観の中に窯が写っていたわけである。幸い、その窯の関係者もみつけることができ、写真に含まれる歴史や暮らしについて若干の知見を得ることができた。

近年、「パブリック・ヒストリー」が注目されている。<sup>22</sup>パブリック・ヒストリーは、「正統な歴史」というよりは多種多様な歴史といえるかもしれない。ややもすると、暮らしや文化、さらには自然環境<sup>23</sup>など、歴史から忘れがちになることも多いと思われる。公文書館は、沖縄県から引き渡された公文書や琉球政府文書、その前身機構の文書だけではなく、沖縄関係文書として在米収集資料や個人や法人から寄贈された文書がある。また、公文書として作成された資料のうち、特に写真資料は、文書と共に保管されていないとき、また米軍撮影資料などキャプションからは場所の特定が困難な資料もある。今回のように、聞き取りや文献をもとに、写真（景観）に含まれる歴史を掘り下げていくことは、沖縄県の歩みを残すうえで必要と思われる。このような意味で、公文書館の所蔵写真は、貴重であり、多くの情報を提供してくれる。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたり、聞き取りに協力していただき、資料も提供していただいた沖縄石灰工業所代表大城陽三氏に感謝します。また、佐藤寛之氏、大田文子氏にはコメントを頂いたことを記して謝意とします。

22 菅豊・北條勝貴（編）『パブリック・ヒストリー入門』（勉誠出版 2021）

23 今回は、自然環境については特に触れてないが、当山昌直「自然利用の伝統的知識」『大宜味村史 人と自然編』大宜味村教育委員会（2022）の中で1950年代の写真から過去の自然環境について述べている。